

演題番号：3

演題名：山羊肝臓病変の病理学的考察

発表者名：○浅岡佑太 仁平真由美 高木祐司

発表者所属：北部食肉衛生検査所

1. はじめに

山羊の解体後検査時に肝臓病変にしばしば遭遇する。しかし、山羊肝臓病変の症例報告は少なく、診断に際して牛や豚での症例を参考にすることがある。そこで今回、と畜検査の一助とする目的で結節病変を27症例検討したので報告する。

2. 材料および方法

平成22年5月から平成24年12月までに結節病変を認め病理検査を行った山羊肝臓27検体を対象とした。定法に従いHE染色、必要に応じアザン染色、チール・ネルゼン染色、メイグリユンワルド・ギムザ染色を行い鏡検した。

3. 結果

(1) 肉眼所見：結節病変部の色は19検体で白色、4検体で乳白色、3検体で白色透明、1検体で淡黄白色であった。形は18検体で不整形、9検体で円形であった。また、病変部に出血をともなっていたのは21検体で、病変部に膿瘍を認めたのは16検体であった。

(2) 組織所見：22検体で顆粒球を主体とする炎症細胞の浸潤を認めた。そのうち、17検体では病変内に複数の壊死巣が存在し肝実質との境界が不明瞭であった。結節内の壊死部は顆粒球やその変性産物から成り、周囲に類上皮細胞や多核巨細胞を認めた。壊死部に菌体や寄生虫体を疑う像、石灰化を認める像もあった。また、5検体では壊死巣は厚い結合織によって区画され肝実質との境界は明瞭であった。

5検体でリンパ球を主体とする炎症細胞の浸潤を認め、門脈域で結合織の増生を伴っていた。

4. 考察

検討に用いた検体は肉眼的に様々な形態を示していたが、そのほとんどが肝膿瘍と考えられた。肝膿瘍は、凝固壊死巣の形成、好中球による壊死巣の融解、結合織による被包化を経て、吸収・癒痕化するとされている。今回認められた様々な肉眼所見および組織所見も肝膿瘍の形成過程を示していると考えられる。しかし、肉眼所見と組織所見との間に関係性を見出すことは出来なかったことから、診断には病理検査が必要であると考えられる。肝膿瘍の原因として、牛では第一胃粘膜から侵入した常在細菌が原因となることが多いとされている。今回、組織所見で菌体が認められた症例では細菌感染が原因となったと考えられる。しかし、寄生虫が原因となった肝膿瘍の報告があることから、今後は病理検査以外の方法も用いて肝膿瘍に至った原因を特定したい。